

我が家の「ジョージ」骨折する

吉川はる奈

「ドサッ!」という大きな音が背後で聞こえ、振り返ったその瞬間、「しまった!」と心の中で叫んだのを今でも鮮明に覚えている。

いつものようにKはひとまねこざるの「ジョージ」の曲芸のように、ソファアの堅い背もたれ部分を渡っていて足を滑らせ下に落ちたのだった。

いつもは裸足なのにその日はたまたま靴下を履い

ていたこと、落ちた状態が右肘と左手のひらで全身を支えた形という不安定な姿勢だったこと、しばらくしてから泣き叫ぶKの声の大きさが普通ではなかったことで私は悪い予感がした。

Kは三歳六か月を迎える頃からH・A・レイの絵本『ひとまねこざる』シリーズ(岩波書店)に

のめり込み、生活の全てに『ひとまねこざる』の「ジョージ」が出現していた。

毎晩寝る前に読んでもらう絵本には『ひとまねこざる』シリーズを当然のように指定した。シリーズのうちでもお気に入りには『ひとまねこざる』と『おさるのジョージびょういんへいく』の二冊で他のシリーズよりも指定される回数が多かった。

遊びの中にも「ジョージ」はいつも登場した。外では、三輪車に乗るときに「ジョージはこんな風に自転車に手放して乗ったり、後ろ向きに乗ったりすることができません」と言いながら「ジョージ」になりきって、「手放して」乗ったり「後ろ向きに」乗ったりしていた。

家の中ではソファの堅い背もたれ部分の上を裸足で曲芸のように渡ることがお気に入りだった。このソファは背もたれの部分が普通のソ

ファよりも高くなっていて、堅さといいコーナーがあることといい、「ジョージ」になりきって曲芸をするにはもってこいの遊び場になっていた。

さて、悪い予感の中していた。

私は大泣きするKを抱きながら、「大丈夫？」「痛い？」を繰り返すことしかできなかった。夕食前で七時を回っていたから救急病院に行かないと診てはもらえないことは予想できた。

ようやくKが泣きやんだので、私が「痛いかなあ？ 病院へ行ってみてもらおう。骨折しているところから」というと「痛くない」ときっぱりいう。

今にして思えば慌てた私は何てよけいなことを言っていたのだろうと思う。おさるの「ジョー

「ジ」も逃げる途中ビルの階段の高いところから落ちて骨折し病院に入院するのだ。「ジョージ」になっっているKにとって、高いところから落ちたらどうなるか、すでに絵本の中で何度も経験していたことであつたのだ。

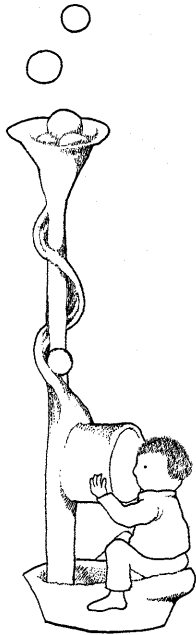
結局「痛くない」と言い張り右腕を上げてみせるKに負けて、次の日の朝まで様子を見ることにした。次の朝Kの右肘は腫れもなく外見上は何ら普段と変わりがないように見えた。しかし明らかにKは右手をかばって動いていた。「痛いんですよ」と私の問いかけに「痛くないよ」と言い張る。あまりに言い張

るので「保育園から帰ってきてはまだ痛かったら病院へ行こうね」と言うと「うん」と初めて素直にうなず

いた。

Kがその日の長い保育時間をどのような思いで過ごしたかと思うと心が痛む。朝保育園で、担任の先生に事情を話して「夕方病院へ連れていくつもりだ」と伝えた。

夕方迎えに行くと、先生は「保育園では普段と変わりなく体操やお遊戯をしていた」という。Kに「痛いの？」ときくと「大丈夫」ときっぱり。「でもおやつを食べたら病院にいきましょうね。約束だもん」と私が言うと、Kは何も言わずにうなずいた。



病院へ入った。Kにとってはなじみのあるかかりつけの内科の先生のところではなく初めて入る大きな病院だった。

レントゲン室や処置室では「お母さんは出ていて下さい」といわれKひとりがたくさんの男の先生に見てもらっていた。

私は最悪の事態を覚悟しながら廊下で待っていた。そして最悪の事態を覚悟しなげ、もっと早く強引にでも連れてこなかったのだらうと悔いていた。そのとき、廊下に大声で泣き叫ぶKの声がかんこえてきた。

「Kちゃんはジョージじゃな——い!! ベーカー先生（ジョージが診てもらった先生）の所には行きたくな——い!!」この文句が何度か繰り返された。

長い待ち時間の後「じゃあお母さん入って下さい」という声におそるおそる入ると、先生がレントゲン写真を見せながら言った。「骨折していません」。Kは泣き顔で処置台のうえに座り腕を包帯で吊られていた。

「ジョージ」の姿だった。

我が家の「ジョージ」はそれから一か月間自由な思いで過ごすこととなった。

津守（一九八〇）は『保育の体験と思索』の中で「三歳のときには三歳なりの生活が充実することとがたいせつなのである。それぞれの時期が充実しているときに、それは成長の途中の未熟な段階なのではなく、その時期としての成熟があるのだと思う」と語っている。Kは「ジョージ」になりきることで充実した「今」を過ごしていたに違いない。

ない。Kの生活の全てがおさるの「ジョージ」の世界であったのだろう。「ジョージ」の世界に入り込みながら、それは骨折という事態までもたらしめた。だがKは処置室でもレントゲン室でも「ジョージ」の世界に全身で入り込みながら来るべき次の事態を予想し、その最悪の事態からは逃れたい一心で「Kちゃんはジョージじゃな——い」と叫ぶ。

ここまで全身で「ジョージ」になりきる姿。まさしくそれはKにとっての充実した「今」、成熟を垣間見たような気がした。

「ジョージ」の骨折は絵本の中ではすぐに治っていく。数頁めくると映画に出演するほど元気になっている。だがKにとっては一か月間の不自由な生活は決して短い期間ではなかったことだろう。完治し三か月以上経つが、時折「ジョージ」

の生活を送っている。以前ほど毎日の生活の全てが「ジョージ」の世界というわけではない。その間にKは「ジョージ」以外にTVのヒーローもの世界にのめりこみ始めたのだ。しかしKは今も、「ジョージ」とはより深いところでしたっけと結びついてるに違いない。

(お茶の水女子大学)